

## 夢・うつつ

関西支部長 石井康一



新聞や雑誌にマルチメディアという文字が頻繁に見られるようになった。本誌にもそれを多面的にとらえた特別小特集が組まれていく。学会から巷間まで同じ言葉が広く期待を込めて話題になることは、従来もなかったわけではないが、珍しいことである。

数か月前に郵政省は「21世紀の知的社会への改革に向けて」という情報通信基盤整備プログラムの中で、マルチメディアのインフラストラクチャとしての光ファイバ網を2010年までに整備する計画を示した。その中で情報通信基盤を階層化して最高層（第4層）に価値観・法秩序を配し、これらはライフスタイルやワークスタイルという形で具現化されるとしている。

マルチメディアというとき、ビジネスの世界とプライベートの世界では描くイメージもかなり異なる。

ビジネスの世界では、感性に訴える部分がないとはいえないが、原則はそのアプリケーションがもたらす情報や便利さの値打ちと利用料金との関係が価値観の基本である点に変わりはない。アプリケーションの有効性に対する認識と若干の規範の変更は必要だが、根本的な価値観の変化が必要なわけではない。むしろ企業活動に有効なアプリケーションの創出が鍵である。

一方プライベートの世界では、そのアプリケーションが提供する情報や知識の価値もさることながら、そのアプリケーションがどれだけ豊かに感性を満たしてくれるかが重要である。ビデオオンデマンドが代表的アプリケーションといわれるゆえんである。いつでも、居ながらにして、欲する情報（ビデオ）に接することができるということの価値が認識されることが必要である。また、価値観の多様化が進む中であって、マルチメディアが一時的な流行としてではなく継続的に受け入れられ、それによってライフスタイルが変るほどになるためには、提供される情報の中身や提供の方法がよほど魅力のあるものでなければならないであろう。

もう一つ大切なことは、高度なバーチャルリアリティを可能とするマルチメディアに人が操作されるのではなく、人が主体的にマルチメディアを活用するという利用形態の健全性である。夢（Virtual）とうつつ（Real）とが識別されつつそれぞれの良さが活用されなくてはなるまい。

関西でも新世代通信網実験協議会による実験が始まっているが、その成果に期待すると共に、いろんな側面をもつマルチメディアが健全にバランスよく発展し、夢が現実のものとなって、真の新たなビジネスと文化の創造となるよう願うものである。